

■殿様日記 vol.15 越後大茶会

令和4年 雁来月（8月）

長岡市茶道文化協会は平成29年（2017）に結成された。会員数は様々な流派関係者や茶道愛好家の方々約350名である。

3年前に計画された第1回越後大茶会はコロナウイルス感染症拡大のため、やむを得ず中止となっていたが、令和4年7月17日に開催の運びとなった。会場は長岡市役所のあるアオーレ長岡内アリーナで、流派は問わず誰が席主になっても良いという茶会である。大会委員長の言によれば、今から435年前に催された豊臣秀吉公の京都北野大茶会をイメージし、茶葉を用いれば抹茶以外に煎茶、紅茶、ウーロン茶など様々なお茶を気軽に楽しむ事を目的としたお茶会にしたい、とのことであった。

私にも一席持つてほしいとの依頼があり、何の茶道経験もない私が牧野家席を設けることとなった。頼みの綱は宗偏流を習っている愚息忠慈である。事前の席紹介欄には、

「越後長岡藩主17代当主牧野忠昌と18代忠慈によるお席です。牧野家600年の歴史をゆかりのお道具と共にご堪能くださいませ」と記した。

一席の広さは間口5メートル奥行き7メートルの区画で、新潟県下の席主20名がそれぞれ趣向を凝らして一つの茶席を作るものであった。

牧野家席ではまず受付横に私の名入りの提灯を掲げ、殿様のみ使用する七間梯子の旗指物を置いた。提灯はもう一つお点前横に愚息名のものも置き、中に



越後大茶会開催



牧野家席受付

は蠟燭の代わりにLEDの灯りを入れた。お点前席は一段高くして畳を敷き、その横に床の間風の空間を演出した。

お客様は少し距離を取ってゆったりと楽しんで頂けるように7席にし、1席の時間を15分とした。



点前座と床の間



会記

会記は気楽なお茶会ということもあり、本来の会記様式から少し外れたが皆様を楽しめることに重点を置き、A4判に印刷した後、約10センチメートル四方になるように折り、和服の懐に収まるように工夫した。会記にお道具のすべてを書くのではなく牧野家の歴史が分かるように時代順に主な品を書きだし、帰宅後牧野家席を思い出して頂けるようにお道具の絵を忠慈が描いた。

会記を受け取ったお客様が着席された後、私の説明が始まった。

「このお席は牧野家にかかわる歴史のほんの一部をお道具に託して表現しました。本来のお茶席のルールから外れるしつらえも少しございますが、時代を追ってご披露したいと思います。牧野家の祖先は三河国、現在の愛知県です。今から約600年前、室町幕府4代将軍足利義持の命令により地頭となり名字を田口から牧野に改めました。」

「牧野家の家紋は三つ柏と五間梯子です。お菓子は殿様のみ使う七間梯子の焼き印入りふやきと和三盆の稲穂のお干菓子を江戸時代からお世話になってい



懐紙とお菓子



絵画

る大和屋さんに作って頂きました。お懐紙は内側に三つ柏紋を押し7名のお客様それぞれ異なるように7色用意しました。」

「あちらの絵は五間梯子が家紋となった由来を表した絵で、作者は新潟日報連載時代小説

『河井継之助、龍が哭く』の挿絵を担当された日本画家の中村麻美さんです。戦国時代のある時、牧野の殿様は敵に追われて農家の『にお』にかくまってもらいました。稲わらで隠してもらって何事もなかったように梯子を立て掛けたところ、追手は何も気づかずに通り過ぎてしまいました。領民が殿様をつきだせば褒美をもらえたのに、そうしなかったのは普段から牧野家が領民を大切にしていたからです。殿様はこの出来事を忘れず今まで以上に領民を大切にしようと思われ、藩のしるしを『五間梯子』にした、と伝えられています。」



氷が浮かぶお薄



香合



初代牧野忠成公木像

お薄はお客様に五感で涼しさを感じて頂くことを念頭に工夫し、氷を浮かべた冷茶を差し上げた。この冷茶については抹茶の分量、冷水の量、氷の大きさなど事前に何度もテストを繰り返した。また会場には冷蔵庫が無い^{ため}強力な保冷剤を入れたクーラーボックスを使用し、氷の融け具合と冷水の確保、お茶碗を冷たくしておくことにも気を配った。

「床の間の説明を致します。香合台は牧野一族が三河で生活していた屋敷の屋根瓦の一部で三つ柏紋が描かれています。この瓦の上に香木を飾り香合に見立てました。」

「木像は長岡藩初代藩主の牧野忠成公です。今から404年前、この方から長岡藩は始まりました。作者は^{えのきえつうん}榎越雲です。明治から大正にかけて活躍した彫刻家で15代忠篤公と親しい方でした。」

「牧野家が治めた250年間のうち、3人の藩主が徳川幕府の老中職を務めました。9代忠精公、10代忠雅公、11代忠恭公の3人です。9代忠精公は、宗徧流を長岡に広めた方です。また雨龍の画がお得意で多くの掛け軸などが残っています。10代忠雅公の時代には、江戸湾にアメリカのペリーが4隻の軍艦を率いて日本との外交を要求してきたのですが、その時の外交問題を担当する海防掛老中だったのが忠雅公です。」

「11代忠恭公は北越戊辰戦争の時、大殿と呼ばれていました。現在上映されている映画『峠』では仲代達也さんが演じています。この掛け軸は11代忠恭公の絵で、酒樽の上に恵比寿様が乗っています。」

「江戸時代から明治になると武士たちも何か職業に就いて生活しなければなりません。忠恭公の長女つね姫は長岡藩の酒蔵にヒントを得て「柏露」と言う名の酒屋をはじめ、女性社長になりました。父の忠恭公は繁盛するようにと願いを込めてこの掛け軸の絵を書いたと伝わっています。オーナーは変わりましたが、今でも柏露酒造の名は残っています。」

「お薄のお茶椀は今千春先生の作で、薄型のお茶椀です。花入れは18代忠慈の作で、お花は『熱帯スズラン』です。」

「床の間のお茶椀は、私が80歳になった時(傘寿)に作った8個の一つで、長岡城の御三階を描きました。お茶



恵比寿様の掛軸



花入れと花

笏も私の作でこの越後大茶会のために削り、名を『涼』としました。」



お茶椀とお茶笏

「本日は大変厳しい暑さの中、お出で頂いたお客様に一時でも涼しく感じて頂ければ、と思いお薄を用意させていただきました。ご退屈様でございました。」

最後になるが、今回のお席は愚息忠慈が宗徧流をお習いしている桑原宗夏先生はじめお社中の皆様の多大なご協力が無ければ実現できなかったことで、心より感謝申し上げます。傘寿を迎えた私が愚息とこのようなお茶席を持つことは夢にも思っていなかったことで感慨一入である。